

令和6年度伊那市立春富中学校評価表

学校関係者評価；（A：十分達成された B：ほぼ達成された C：不十分であった）自己（項目間相対を加味した到達度）評価（a：十分達成された b：ほぼ達成された c：不十分であった）

学 校 教 育 目 標	重 点 目 標（中長期的目標）	総 合 評 価		
理想をめざし、 たくましく 実践する人になろう	すべての子どもがもてる力を発揮し、「学び合いの授業」を軸とした授業づくりを通して、思考力・判断力・表現力を高めていく。	学校関係者の皆様から 子どもたち、学校・先生方がやりたいことを大いに発信してほしい。文科省など多々な指示が出されるが、春富中学校らしさを出すことを基盤として運営できるとよい。現在、春富中らしさは十分出ていると思う。経営の理念「きく」。自分の考えを素直に発信でき、まわりの声を聞くことのできる生徒になるとよいですね。		
	今 年 度 の 重 点 目 標	成果と課題	評価	改善策・向上策
	(1) 授業を学校づくりの根幹に考える ○学び合いを軸とした授業づくり ○授業のユニバーサルデザイン化 ○教員のたゆめぬ研鑽	(1) 学校アンケートにおける「学習内容の理解」に関する質問では、生徒の96%が肯定的な回答であった。また、保護者では肯定的な回答が58%であった。生徒と保護者の捉えに差があるため、得点力に反映できるような授業づくりが課題である。	C b	○4人1グループでの話し合い活動を中心とした、生徒が対話をしながら主体的に学ぶ合う授業づくりを継続して推し進める。 ○ICTを活用しながら、個別最適な家庭学習のあり方について実践を積む。
	(2) インクルーシブな教育環境づくり ○互いの違いや良さを認め合える集団づくり ○「きく」ことから始まる生活指導 ○命の教育に結びつくキャリア教育	(2) 春富5校研修会において、「特別支援教育・個別支援と進路指導」をテーマに講師によるパネルディスカッションを聴講した。小中が連携して継続的に進路選択を行っていくことの重要性を学んだ。	B b	○個の生徒に対する特別支援・個別支援は充実してきているが、集団におけるインクルーシブな取り組みについては、UD化も含め徐々に実践を増やしていく。
		(3) 学校アンケートにおける「人や地域との関わり」に関する質問では、生徒が82%保護者は68%が肯定的な回答となった。PTA行事などの実施方法見直し等で保護者の意識が低下していることが推測される。	B b	○地域からは、「さらに中学生が地域で活躍する姿を見たい」と願う声も聞かれる。生徒の「生きる力」を育むために、地域との交流活動を継続的に実施し、体験活動や探求学習などを通して、生徒の主体的に判断し行動する資質・能力向上を推進する。

領域	対象	評価項目	評価の観点	成果と課題	評価	改善策・向上策	
教育活動	教育課程	○「生きる力」の育成につながる教育実践	○すべての生徒にとって居場所があり、存在感・信頼感のもてる学校づくり・学級づくりに努めたか。	○「学校に行くのが楽しい」と感じている生徒は 91%で、前年度を 6 ポイント上回った。一方保護者は 75%であった。生徒の意識は高まったが、保護者の捉えとの差があった。	B b	○今年度はこれまでのグランドデザインを大幅に見直し、言語表現としてはシンプルにわかりやすくしつつも、目指す方向性は明確に示せるよう改訂したが、家庭へ発信する機会が少なかったため、学校だよりを有効活用し、発信の機会を増やす。	
		○特色ある教育課程の展開	○「ICTを活用する」から「学習の場面に応じて生徒が主体的にICTを活用し、協働的で対話的な学び合い」となる取り組みが展開できたか。（教科、道特、特別活動、総合的な学習、生徒会等）	○生徒会活動を中心に年々ICTの活用場面が増え、またクオリティーも向上している。授業にとらわれず、様々な場面で活用できる発想が身につくつつある。 ○学習の場面において個別最適な学びをサポートする活用方法に課題が残った。	B b	○学校の特色として、引き続き活動を継続していく。 ○教科学習にとらわれず、総合的な学習の時間や生徒会活動等を通して、自分たちから進んで広い世界とつながろうとする意欲が高められる取り組みを展開する。	
	学習指導	○対話的活動を中心に、学び合いの中から自他と向き合い、わかった、できた喜びのもてる授業	○基礎基本の定着を図るとともに、「わかるようになった」「できるようになった」という実感がもてるような授業ができたか。	○前年に引き続き「わかった」「できた」と実感を持っている生徒が前年度を上回った。対話活動についても徐々にその数値を上げつつあるので、思考力・表現力・判断力を伸ばすための授業づくりを展開したい。	B b	○全国学力・学習状況調査、外部の標準学力調査、校内の定期テストから生徒の学力の定着度を分析し、対話による学び合いの授業づくりと ICT を活用した個別最適な学びについて実践を増やしていく。	
		○相手に伝わる表現力の育成	○仲間の声に耳を傾け、対話を通して自己の考えをまとめ、表現したり発信したりできるようにするために、話し合い活動や伝え合う場面を積極的に授業に取り入れたか。	○学校アンケートにおける「授業中の対話」に関して、肯定的な回答をした生徒は約 67%で前年を 1 ポイント上回ったが、まだ十分な評価数値ではない。	B b	○4人でのグループ学習を継続し。授業内での生徒どうしの話し合い活動の場面を意図的に増やす。単なる話し合い活動ではなく、生徒の主体的・対話的な深い学びに繋がるグループ学習と授業づくりを次年度も継続させていく。	
	部活動	○心身の健全な発達を図る部活動の実施	○適正な練習内容・練習時間での活動を実施し、体力の向上や技能の向上が図れたか。	○部活動指針の徹底をはかったため、やや物足りなさを感じている生徒もいたようであるが、生徒の部活動に係るアンケートは、肯定的回答が 95%となっており、前年度と同等の評価を得た。	A a	○部活動指導員、外部指導者およびクラブチームと連携し、生徒の発達段階に応じた適正な活動内容の検討と地域移行に向けた取り組みをできるところから行う。	
		○協調性・社会性を醸成する部活動の実施	○集団の一員としてルールを守り、お互い協力し合いながら目標に向かって努力することができたか。	○部活動や地域クラブ活動を行っている生徒保護者の 87%が、活動に対して意欲的に取り組んでいると考えている。部活動に対する関心が比較的高い地域性もあり、協調性・社会性を醸成する部活動の在り方が今後も望まれている。	B b	○今年度同様、部活動運営委員会を開催し、各部の保護者との情報交換をしながら、地域移行も含めた部活動の在り方について検討していく。	
	生活指導	○全ての生徒にとって居場所があり、存在感・信頼感のもてる学校・学級づくりに努めたか。	○問題行動・不登校への予防的対応に心がけ、安心できる学校・学級づくりに努力したか。 ○生徒理解に基づいた個々の生徒への支援ができたか。	○いじめが疑われる事案に関して校内いじめ防止対策委員会を設置して対応したが、委員会としての対応までに時間がかかることがあった。	B a	○職員と生徒とのより良い関係づくりのために、定期的な生徒相談の時間の設置、生徒が気軽に相談できる体制の整備を継続していく。 ○いじめが疑われる事案に対しては、速やかに委員会を設置して学校としての対応を行う。	
		○凡事の徹底	○挨拶、清掃、時間等、日常生活での当たり前のことにきちんと取り組めたか。	○挨拶は、校内だけでなく地域から高い評価をいただいている。アンケートの肯定的回答の割合は生徒が 92%であった。一方で保護者からはあいさつに対して物足りなさを感じているとのご意見をいただいた。	B a	○挨拶は肯定的回答 90%以上の維持を目指し、生徒の良さを認める声かけをしながら、地域に信頼される学校づくりに取り組む。 ○生徒会ともタイアップして、生徒の主体的な実践を推進する。	
	学校運営	安全	○安全意識の向上	○安全教育を通して、安全な通学への心構えや、学校生活に於ける安全意識を向上させることができたか。	○通学路の安全については、生徒、専門家、地域や保護者の意見を集約しながら、通学路の見直しや通学用自転車の仕様変更などを行った。	A a	○引き続きも交通安全指導に尽力する。行政や専門家の働きかけもあり、より安全な通学路に向けた取り組みが進められている。さらに地域との連携を密にしながら、安全な登下校の実現を図る。
			○安全の確保	○施設および設備の安全点検を実施し、事故防止に努めたか。 ○通学路および登下校時の安全確認を定期的の実施したか。	○管理場所、遊具、体育設備の点検を毎月実施し、安全な学習環境維持に努めた。	A a	○施設・管理について、引き続き毎月点検を行い、安全管理の徹底を図る。
地域連携		○学年学級通信、学校だよりを通しての生徒理解	○学級通信や学校だよりによって、積極的に学級や学校での生徒の活動の様子を知らせたか。 ○学校ホームページなどを活用して積極的に情報発信を行ったか。	○学年通信や学校だよりを定期的に発行し、地域回覧するとともにメールや学校 HP による配信を行った。保護者アンケートでは 91%が肯定的な回答であった。	A a	○今後も、学年通信、学校だよりを紙ベースではなく電子化にして、メール等を通して確実に保護者に発信していく。 ○保護者に、学校 HP 閲覧を勧められるよう、学校だよりで案内していく。	
		○地区との交流 ○地域の人材の活用	○地区へ出向いたり、地区の人を招いたりして、交流活動を積極的に行ったか。 ○地域の人材を積極的に活用した授業・学習支援を実施したか。	○ほぼコロナ禍前の活動に戻りつつある。学校アンケートにおける生徒の肯定的な回答は生徒 82%、保護者では 68%であった。 ○地域からは「もっと中学校の活動を見たい」という要望もいただいた。	B b	○地域との交流、連携は、本校の特色ある教育活動の一つであるので、地域との交流活動や地域の教育力の活用および新規発掘を継続する。 ○探求的な学びへの変換を更に推進していく。	

	研 修	○校内研修の実施	○授業改善のために、公開授業や教科内に於ける教科研修を実施したか。		B b	○「対話活動」「ICT活用」「授業の振り返り」を研究の中心に据え、研修を継続する。 ○伊那市学力向上プランを参考にしながら、本校の課題である生徒の対話による授業づくりについて更に研修を進めていく。
		○校外研修への参加	○自己の授業力の向上や生徒指導力の向上のために、校外研修に参加したか。		B b	○職員が研修を積むために学校を離れる機会が取りやすくなるよう、校務調整および日程調整等を積極的に行い、できるだけ校外での研修に参加できる機会を確保するよう努める。